

【旧約聖書日課】列王記上 19章3～18節

³それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、⁴彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」⁵彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」⁶見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になった。⁷主の御使いはもう一度戻って来てエリヤに触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。⁸エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。⁹エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、主の言葉があった。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」¹⁰エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」¹¹主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起り、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。¹²地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。¹³それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」¹⁴エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」¹⁵主はエリヤに言われた。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。¹⁶ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。¹⁷ハザエルの剣を逃れた者をイエフが殺し、イエフの剣を逃れた者をエリシャが殺すであろう。¹⁸しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」

【福音書日課】ルカによる福音書 9章51～62節

⁵¹イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。⁵²そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。⁵³しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。⁵⁴弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。⁵⁵イエスは振り向いて二人を戒められた。⁵⁶そして、一行は別の村に行った。

⁵⁷一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。⁵⁸イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」⁵⁹そして別のの人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。⁶⁰イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」⁶¹また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」⁶²イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

逃げた先で【こども説教のために】

主イエスは、祈るために山に登られることがありました。ある日、三人の弟子だけを伴って高い山に登られたときのこと、主イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いていました（ルカ 9:29）。弟子たちは、二人の人がイエスと語り合っていることに気づきました（同 30 節）。それは、モーセとエリヤでした。二人は、「旧約聖書」に伝えられる預言者です。

モーセもエリヤも、山で主なる神に出会っています。二人とも、同じ「**神の山ホレブ**」で神とお会いしたのです（出 3 章参照）。けれども、彼らは、自分から神にお会いしようとしたわけではありません。何かから逃げて、そこに辿り着いたのです。モーセはファラオの支配するエジプトから、エリヤはイスラエルの王アハブと王妃イゼベルから、逃げていました。命を狙われていたのです。でも本当は、神から逃げていたのかもしれませんが。モーセはエジプトで、エリヤはイスラエルで、神から与えられた使命があったのです。

逃げた先に「神の山」がありました。二人は知っていたのでしょうか、そこが「神の山」であることを。どちらにしても、そこに行くしかなかったのです。神の使命から逃れて行くことのできる場所は、「神の山」しかないのです。そこで、神はお待ちです。逃げてきた者をお待ちです。わたしたちをお待ちなのです。日曜日の教会も「神の山」なのです。

山に向かう

日曜日の教会においでの方々に、「今日も、神の山に逃げていらっしやっただけですね」と申し上げたら、どうお答えになられるでしょうか。「はい、そのとおりです」とお答えでしょうか。それとも、「とんでもない。わたしは、礼拝のために、そう、主なる神に情熱を傾けてお仕えるために、ここに進み出てきたのです」とお答えになられるでしょうか。

わたしは、登山の趣味があるわけではありませんが、若いころは定期的に山に通っていました。育った教会は、群馬の山中に自前のキャンプ場を設けていましたので、学生たちは、夏の数週間、自分たちのためのキャンプだけでなく、各世代のキャンプが続く間、奉仕のために交互に山にこもって過ごしました。大学を卒業して、教会キャンプの奉仕も卒業した後は、昆虫の生態研究のために、ある山の中腹に設けた調査地に通う日々が続きました。若き日のわたしにとって、山に通うことは、あって当たり前の習慣でした。その後、神学校に進み、結婚し、牧師になってからは、山に通う機会はまったくなくなってしまいました。それでも、時折り、無性に山に行きたいと思うことがあります。山に行くことを欲している自分がいるのです。もっとも、日曜日に現実逃避して山に向かうようなことはしないつもりですが。

主イエスが、弟子たちを伴って山に登られたのは、祈るためでした。神とお会いするためです。けれども、そこで主イエスがモーセやエリヤと顔を合わせていることを、弟子たちは知りました。「神の山」には、二つの側面があるのです。第一は、神にお会いし、御言葉を聞き、使命を与えられて遣わされる場所。第二は、神に与えられたところから逃れ、弱音を吐き、倒れ伏せ、しかし、御手によって助け起こされる場所。

山を下られた主イエスは、弟子たちに、新しい目的地を示されました。エルサレムです。別名「シオンの山」です。今度は、弟子たちを皆、そこに伴われるおつものようです。ただし、そこは、主イエスの最終目的地ではなかったようです。それは、「天」だからです。

エルサレムに向かう途上、主イエス一行は、サマリア人の村に立ち寄りましたが、歓迎されませんでした。彼らサマリア人には、エルサレムではない、自分たちの目指す山があったのです。「ゲリジム山」という山こそが、彼らの大切にしてきた「神の山」でした。その山を目指さず、別の山、殊にエルサレムを目指す者とは、互いに反目し合ってきました。

人は、地上の山を選び好みします。それが「神の山」であったとしても、自分に合う山であることを好むのです。そうであればこそ、主イエスは、地上のどこかの「山」を越えた「究極の山」、「天」を目指されたのでしょうか。そのようなところに、どうしたら皆を向かわせることができるのでしょうか。

行きなさい

サマリア人の村で歓迎されなかったことを不満に思った二人の弟子は、主イエスに進言しました、「**主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか**」と。彼らは、このお方に従って来たのです。このお方に、天から火を降らせて町を焼き滅ぼしてしまえるような権能が
おありだと、信じていたのでしょうか。このお方に従っていれば、そのような権能を自分たちも発揮できると、確信していたのでしょうか。主イエスに従って来て、もはや怖いもの知らずでした。見上げた態度です。けれども、彼らは、主イエスにたしなめられてしまいました。

彼らのうちの一人でしょうか、それとも他の者でしょうか、道を進む途上で、主イエスに申し出る者がいました、「**あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります**」と。主イエスは、弟子たちと対話を重ねられました。態度の煮え切らない弟子たちに、従う者の覚悟を説いているのでしょうか。いいえ、むしろ逆ではないのでしょうか。何事につけ、あれかこれか、白か黒かと、二者択一で物事を判断したがる者に対して、多少皮肉やユーモアを交えて、あれかこれかではない、白黒ではない、柔軟な考え方をするようにお導きなのではないのでしょうか。

たしかに、主イエスは、山の上でモーセやエリヤと共に過ごされたのです。

モーセは、不思議な生い立ちによって、ヘブライ人でありながらエジプトのファラオの家で育てられました。しかし、その与えられた恵みを、すべて無駄にして逃げ出してしまいました。エリヤは、王妃イゼベルの引き連れてきたバアルの預言者らと宗教対決をして、完全な勝利を収めていました。しかし、それは、王妃イゼベルの態度を頑なにするだけでした。神に忠実に仕えようとしたエリヤの努力は、無駄に終わりました。疲れ果てたエリヤは、イゼベルの怒りに、もはや耐え切れず、遠い地への逃避行をしたのです。しかし、モーセにもエリヤにも、逃れた先に「神の山」が備えられていました。神の御心を尋ね続け、問い続け、聞き直し続けることのできる「神の山」が、備えられていたのです。

与えられたところから逃げ出してもよいのです。疲れ果てて、倒れ込んで
もよいのです。すべてを放り出して、「**もう十分です、わたしの命を取ってください**」と訴えてもよいのです。そこが「神の山」であることに気づくことができさえすれば、そうし続けてよいのです。

その山は、エルサレムか、ゲリジム山か。あの教会か、この教会か。どこであろうと、主イエスは、「天」という山を目指されます。主イエスが目指されたところから従って行くとき、わたしたちは、どこにあっても、「神の山」に導かれているのです。